謝　辞

先の３月をもって，23年間にわたる立教大学での教員生活を終えました。月並みな表現ではありますが，本当に長くも感じ，またあっという間でもありました。在職中は，先輩の諸先生や同僚たち，事務の方々には大いに励まされ，また助けられ，感謝の念に耐えません。思い返せば，講義やゼミ，体育会・自動車部のお世話など，楽しいことばかりでした。とりわけ，在職途中で取り組むことになった，夜間大学院の社会人コースは，終了時間が遅く大変ではありましたが，目的意識の旺盛な学生さんたちに恵まれ，有意義な時間を過ごせたと思います。

また編集委員会には，『立教経済学研究』に私のための特別号をご用意下さり，心から御礼申し上げます。今回は，親しい知り合いの中から特に４名の先生方に寄稿をお願いし，また座談会を開催することでこれまでの自分の歩んだ道を回顧してみました。

はじめに，4名の招待執筆者について紹介させていただきます。Gianni Vaggi 先生は，イタリアの Pavia 大学の教授で，わが国ではケネー研究の大家としてつとに有名ですが，最近は経済発展論にも取り組んでおられます。私の在職中に，立教大学にも招聘し，フィジオクラートや古典派について素晴らしい講演をしていただきました。今回は，アマーティア・センをスミスとの関連で取り上げ，ルソーやカントなどに始まり，とりわけジョン・ロールズに帰すことができる観念的・超越的な制度論を退け，スミスやマルクス，ミルなどが関心を寄せたとされる，さまざまな歴史的諸条件に制約された異なる諸個人や集団がそれぞれどのように少しずつ進歩していったか，という，センの推奨する分析手法（realization-focused comparisons）を掘り下げることで，人びとや集団のあいだでの公正や衡平性について深い洞察を披瀝されています。浅田統一郎さん（中央大学教授）は，私が大学院生の頃からの畏友で，いまやわが国を代表するマクロ動学の第一人者です。私の退職記念に合わせて，マンデル・フレミングモデルに見られるような，オープンエコノミーにおける財政金融政策の効果についての常識に挑戦する，とても刺激的な論文を提供してくださいました。渡辺良夫さん（明治大学教授）は，私がケインズやポストケインジアンの経済学について勉強するとき，研究会や学会をつうじていつも励ましてくださいました。渡辺さんの論文は，資本主義経済を貨幣的生産経済として捉え，貨幣や広く資産一般を前面に押し出して，『一般理論』第17章の「自己利子率」の概念を中心に資本主義経済の本質に鋭く切り込んだ論稿になっています。最後に，米田昇平さん（大阪産業大学教授）は，私が早稲田大学で学んだときの同級生で，若い頃から彼の学究肌に接して，いつも刺激を受けて来ました。今回の「グラスラン再論」は，効用理論の先駆者とされるグラスランについて，最近の研究成果を渉猟しつつ，もっぱらその主観的な効用理論と別に，労働

による価値の決定と労働の富への請求権についても検討した特異な論客として位置付け，彼をして，「経済社会を功利的人間の織りなす『欲求の体系』」と捉えた社会観や独特の効用理論に特徴づけられる18世紀フランス経済学の一側面について，その先進性の一翼を担わせんとするものでありましょう。

「座談会　クールヘッドとウォームハート」では，現在，ケインズ学会会長の平井俊顕さん，国士舘大学の野下保利さん，中央大学の浅田統一郎さんの３人の先生をお招きし，私を含め，４人に共通するテーマで自由に語りあいました。なお，活字化にあたっては芝浦工業大学の長原徹さんにお世話になりました。

最後に，立教大学の皆さま方，学会でお世話になった皆さま方，そしていつも私を励まし支えてくれた友人たちと家族に，改めて感謝の気持ちを捧げたいと思います。本当にお世話になり，有り難うございました。

2019年８月吉日

立教大学名誉教授　黒木　龍三